

巻頭言

国民健康保険 富士吉田市立病院
院長 松田 政徳



2020年初頭から国内にまん延した新型コロナウイルス感染症（コロナ）は、それまでの医療体系に大きな変化をもたらす歴史的な重大事件となりました。当院のような地域の基幹病院でかつ、感染症の指定医療機関であっても新興感染症に対しては不十分な体制であったと感じざるを得ませんでした。コロナ禍以前は、医療の中心は悪性腫瘍や急性疾患、生活習慣病などであり、感染症はあたかも過去の疾患と見なされ、興味を持つ医療職は少ない状態でした。そのため、感染症を専門とする医師や看護師の不足はコロナ禍の対応に重大な影響を及ぼしました。このようなあらゆる面で不十分な状況下にあっても当院はあらゆる職種の職員がいち早く新型コロナ感染症対策本部会議を立ち上げ、病院職員一丸となって手探り状態から外来診療、入院診療、ワクチン接種等のあらゆる体制を整備し、運用することによってコロナ禍を乗り切ることができました。ワクチンや治療法のなかった初期の対応は、まさに命がけであったにもかかわらず、医療従事者としての使命感から、何の不满も口にすることなく、粛々と業務に当たられた職員にあらためて敬意を表したいと思います。コロナの感染症法上の扱いが2023年5月に5類となり長かったコロナ禍での生活も徐々に以前の状態に戻りつつあります。コロナ発生から4年間に当院が受け入れたコロナ入院患者は約900人とかなりの数にのびました。この間、救急医療や悪性疾患やその他の急性疾患に対する通常診療にはほとんど影響を与えることなく病院機能を維持できたのは、ひとえにすべての病院職員のおかげであると病院管理者として感謝するとともに誇りに思います。今後も、新興感染症の発生の危機は継続すると考えられますので、今回の経験を糧に、より良い対応を目指していきたいと思います。

感染症以外の今後の大きな医療上の問題として、医療技術の高度化とそれに伴う病院運営コストの上昇や少子高齢化と人口減少に伴う患者数の減少などにより、急性期病院の経営はますます厳しくなっていくことが挙げられます。今後は病院の統合や病院ごとの役割分担を明確にして機能に応じた診療を広域で包括的に実施することなどにより、少ない医療資源を最大限活用して、地域全体で医療崩壊を防いでいかななくてはなりません。病院の効率的な運営努力はもちろんですが、現在の医療システムが今後も維持できるためには地域住民の理解と協力も必要であると思います。

当院は、地域住民の皆様が必要とする最善の医療を柔軟に提供することを念頭に、今後も職員一丸となって病院運営に取り組んでいきたいと思っています。